

三、たんぼ……晝食を長濱小學校で済ませて小憩。次は午後のコース。米原に向つて田圃道山裾道を歩む。行程早や五里——吾等の足は漸く棒の様になつてしまつた。苦しい。辛い。而し歩かねばならぬ。とにかく歩く。歩く。

苦を超越した無我の境地——野は霞む。微風は遠く鈴鹿の連山の若葉の香りを齎らす。その薫風を浴びながら、我等は歸校を急ぐ。日は早や傾いた。歩く、歩く。歩みつゝ、私の心はふと山里の路傍のたんぼの花に惹かれる。しきりに見付かる。白秋のあの、蒲公英の歌を思ふ。

廢れたる園に踏入りたんぼの白きをふめば春だけにけり「晩春だなあ」と思ふ。その晩春だのに路傍のこれらの花はまだ人にもふまれず咲いてゐる。たんぼ。可憐なその花はそよ風にゆらぐ。私は思はず之を手折り手にしながら足を早やめた。もう六里も來たらうか。みんな黙々として根強く歩き続ける。

四、歸校……行程七里半、吾等は終に長濱——彦根間、大迂回コースを往復踏破したのだ。

疲労の中にも気分は急に快活になつた。時は晩春好晴若葉風に洗はれながらも暑かつた。かの美しい湖も、霞む連山も全ての自然美は我等の健脚を讃へてくれたのだ。激しい試練の後だが、同時にまた楽しい勝利感が湧く。校庭の銀杏の樹の音を靴音高く踏みつけて最後を分列式で終つた。午後四時

三十分解散。

學林勤勞の感想

四年 福永慶太郎

七月二十八日より七月三十一日に至る四日間に亘る東淺井郡東草野村大字吉槻の奥、一里半弱の地點にある縣第二學林に於ける宿泊集團勤勞奉仕は我々にとつて忘れることの出來ぬ懐しい思ひ出であつた。

追分より七廻り峠を目標に前進するあの傾斜の凄い坂道と吉槻より小屋に向つて山又山の小徑を登つては下りする難行軍に重い荷物を背負つて登攀した時などは我が皇軍諸勇士の支那大陸に於ける縦横無盡の活躍勞苦にも似て忍びえざるを洩いでゆく艱難の体験であつた。

作業場所について最も印象の深かつたのは何と言つても偉大なる大自然のそれである。この偉大なる大自然の中に溶け入つて小我を捨て、俗世を忘れて杉檜の良材の成長を助けてゆく氣持。黙々として、勤勞報國の營みを勵んでゆく心。これこそ將來一軍人として生死關頭に立つて奉公の誠を致すべきその尊き体験ともならう。この山又山の深山溪谷の間にあつて尊き汗を流しての働き、山の緑、空の青、清澄の山氣に

抱かれての刈り伐り拂ひつゝいそしむ日々。夜はあの粗末な小屋の中に薄暗い古色なランプの光の下に二十餘名の者が一致和合するなごやかさ。そこもまた我等日本國民の協力一致の一つの現はれと感じられる。山は人間の氣宇を大にする。氣持ちを清く温かくする。實際今度の學林勤勞奉仕作業ほど今後のため良き體驗となつたものはなかつた。

夜明けの莊嚴さ、冷やかな朝の山の風、さては一面の雜草雜木を刈り拂つた勞働のあとを山上からみ下すたのしさ、豫定完了で山におさらばをして學林の成長をこゝろに下山する時の感じ、谷水、小鳥、夕餉の前後等々。何一つとして忘れられないものばかりである。

日本ライオン

四年 戸所治雄

名鐵電車で名古屋から二時間許り、やつと著いたのが今渡驛である。日本ライオン下りを企て、來た一行には生憎と眞黒な入道雲が東方より押し寄せて今や將に渡し場に向ふ僕等の頭上を低く掠める。爲めに一時は大雨沛然と降り、折角此所迄やつて來てライオン下りも中止せねばならぬかと少なからず氣を揉んだが、幸に二三十分にして漸く雨も小やみとなり、

東の空には早や青い色さへ見え初めた。これで一安心大いに勇氣を得た。而もこの夕立のお蔭で今迄の暑熱も何處へやら肌より滲み出てゐた汗も吹き飛んで非常に涼しくなつた。この邊は町と云つても一寒村で何一つ目立つ建物も無く、唯渡し場の渡守をしてその日の生計を立てゝゐるかの感があつた。然し唯一つ木曾川に架つてゐる橋だけは相當なものだ。何でも此所は、國道が通つてゐるとの事であつた。さて僕等が今乗らうとしてゐる船が又奇妙な形態をしてゐる。鵜飼とか云ふのださうだが丁度端艇部のボートの様なものだ。河が急流なのともう一つ流れの諸處に岩が突出してゐるのでこれに即應して造られたものである。僕等は遊覽切符を持つてゐたのと丁度朝下つた船が上つて來た爲めに苦も無く乗ることが出來た。或人はもう此處で五時間近くも待たされたと言つてゐられた。船頭は如何にも長年の間此の仕事に携つたのであらう言葉には出さないが肌の色其の動作つきが自ら之を證明してゐる。一同は既に危険地帯を通過してゐるのに案外心配な風もなく皆陽氣であつた。これも一つは、船頭を絶對的に信用してゐる爲であらう。渡場より下流二十丁許りの所が最も波が荒いからと注意されてゐたが、果して成程物凄いの川の川底より沸き上つて來るかの激浪は、岩を噛む如く荒れ狂ひ其の飛沫は四邊に飛び去り、其餘勢をかつて船に體當りをくらはせ、更に乗客の衣服を濡す。一度水面に眼をやれば水は何

てゐた勘定となるが、實感としては總行程四里を一瞬時にして下り過ぎた思ひだつた。犬山城其の他を見學の後午後六時五十五分犬山發電車で岐阜へ向つた。

試験 惜敗

四年 北村 一三

試験、それは僕等學徒にとつて少なからず緊張を與へる響を持つて居る。僕等の實力如何を試み驗する、唯それだけの意味に止まらないで、之に依つて僕等の資格は檢討せられ、従つてその望む地位の向上が次第に與へられて行くのである。入學許可、さては一年二年三年と進級は實に此の試験の爲だとも言へる。此の意味に於て本來ならば僕等にとつて試験は待遠しいもの、又嬉しいものであらねばならぬ、が果して僕等にとつて試験は左様に嬉しい許りのものであらうか。否嬉しいよりも惜敗した後がどんなに心痛いものであるかを感じるのが試験である。

僕は日頃「試験は平常と思へ。平常は試験と思へ」と言ふ言葉をもツトとして平常道に努力しようとして居るのであるが、遺憾ながらさう決心はして居るものゝ未だ、實行は出来て居ない。今度第二學期の中間考査があつた。そしてや

處何處迄も青く怪物が今にも頭をにゆつと出しさうな感じがして非常に不氣味であつた。此の邊からは兩岸の山も次第に高く峻しくなり、其の高さ數千丈とも覺しき大絶壁が四邊を狭しと競ひ立ち、其の間には老松古樹が青々と茂り、諸所に水簾の懸つてゐるのを見た。下には波が岩石に岸壁に衝突し飛び散る飛沫は煙となつて消える。ライオン岩、龜岩、五色岩等々幾千幾萬の奇岩、奇石が兩岸に恰も列を成した如く並び、或は河中にその頂をのぞかせてゐるもの數知れず。其の壯觀美觀は名狀すべからざるものがある。而も一葉の小舟はこの間の急湍を危く下るので。一度船頭が舵を誤れば二十人近き我等の船客は一擧にあの世へ行くのかと思へば氣も氣でない。語に「天下の至奇至美なるものは、毎に艱難危険の地にあり」とあるが全くこゝの所だと痛感した。断崖面中部の松の中には鷹の巢を有つものが少くないとか聞いた。と天空を翔ける鷹を見てさへ皆鷹だとはかりに思はれる。桃太郎の發生地も此所だとの事で桃太郎神社を左岸に拜した。斯くして犬山橋の見える所迄下つて來ると兩岸にもぼつ／＼家が見え始めた。此所等邊りは別荘地ださうで豪壯な邸宅が目につく。折から犬山城は一段と高く燦として今や西山に没せんとする夕日に映えてきら／＼と輝いてゐる。何とも形容出來ない美觀だ。斯くて一行は和氣霽々の中に下船した。午後六時十五分だつた。五時に乗船したのだから一時間と十五分乗つ

つと終つた。試験に臨む度に何時も感ずる事であるが、僕は試験が來ると何時も楽しい。だがいざとなると僕は常時からの備へが何としても足らない。そしてその結果は不成績——と烙印を捺されるのが常である。今度も此の自責と懊惱との中で四日間は過ぎ去つた。そしてその中には惜しみても尙餘りある様な失策があつた。急いては事を仕損ずる。硬化して

は駄目だ。これは平常からの備へがないからだ、どうも私には性格からかも知れないが此の事を彥中入學以來何度繰返して來た事であらう。今度もさうであつた。氣が焦つた故の失敗落膽、僕は今口惜しさの絶頂で思ひ返して居る。あゝ、又失策つた。あれもこれも落付いたら十分に出來得らるべき問題を何故あの時あゝしなかつたのだ。皆後の祭だ。下らぬあゝ失策つた。……と、今は憤起の心も無く放心的な目を過して居る。勿論これは急いた許りではない。記憶が確實でなかつたのだ。考へ方が不十分だつたのだ。矢張り勉強が不足して居たのだ。試験を済してかう思ふ心が僕にとつてどんなにか惱ましい。だが時々試験を終つて「うまく行つた」と喜びに堪へぬ時もある。苦心せる後の喜び。それだ。苦心だ忍耐だ。この試験の後の喜びと、之を得る爲の努力とは即ち大いに奮起して最後の勝利を、と思はせる。併しそれも一、二で後の大部は駄目だ。

「試験は運である」と言ふ人があるが、これは失敗者を慰

める言に過ぎない。天下に僥倖によつて成し得るものに何があらう。何と言つても試験には平素が大切だ。後悔は役に立たぬ。急ぐのも硬化するのも、やはり一に常の修練にかゝるのである。今度こそはと、僕は固く／＼心にこれが實行を誓つた。

健康 日本

四年 田村 欣三

「ヨイショウ」「まだ／＼」と行司の聲。
「オウー」と許り掛聲が空を震はしたと思ふや否や兩力士がばつと立上つた。肉弾と肉弾の衝突だ。「があつ」と組合つた。その儘じつとして動かない。夕闇迫る太陽が、「ばあつ」とさし込む。兩力士の影が細長く「ぐうつ」と延びた。丸々と肥えた兩力士と地に投げた細長い影と皮肉な對照を爲してゐる。りゆうりゆうたる肉體が時々びくびくとけいれんする。二人の體は大分赤くなつて來た。「ぐうつ」と引つた肩の筋肉がもり／＼ともり上つてゐる。闘志と闘志との火花を散らしての決戦。血躍り、肉躍る。手に汗を握らせる此の熱戦、僕は恍惚として見守つた。

あゝ健康日本を表徴するこの肉體美は他にあらうか。今或

る日の堺市で觀た大相撲の感激を思ひ出して、何だか體がむづむづしてくる。

西瓜

四年 濱中光覺

あちこちの村々の雨乞ひにも拘らず、空は一點の曇りも見せぬかん／＼照りの田舎道を、僕は散髪した許りの青頭を學生帽で包んで、一心にペダルを踏んで居た。不圖汗を拭ふ氣になつて自轉車を降りると、丁度日の前の畑に、直径二十糎位の西瓜が端々しくみのつてゐた。汗を拭ひ乍ら、棧俵の上に尻を据ゑて悠々と其の圓い青肌を眞夏の太陽を受けて鈍く反射してゐる西瓜、それを見た時、僕は幼い時の西瓜に關する一寸した事件を思ひ出した。

それは僕が尋常小學一年の時だつたと思ふ。薄暗い家の土間には、つい二三日前迄あちこちの農家から貰つた大小とり／＼の西瓜がごろ／＼轉つてゐた。日の経つにつれて一つ一つ融分されたが、最後にこの中で大きさは中位、表面に規則正しい縞のある西瓜が唯一つ取残された。これは夏休みの始めから下痢をして、今迄西瓜にありつけなかつた僕の爲に、たつた一つ残して置いて下さつたものだつた。

た西瓜や、早よお上り」と一寸妙な顔をして早口に言つた。僕は切られた西瓜の列と母の顔とを半分半分に見乍ら黙つて居ると、だしぬかれた、大きな楽しみを失つた感情がぐうつと胸に込上げるのを感じて、大聲で「いらん！ いらん、いらん」と半泣の聲を上げると、そのまゝ母や兄達の驚いた顔に脊を向けて、いきなり大聲に泣き出したのだつた。

今年も西瓜の季節が來た。僕は毎夏、西瓜に有つく度に此の小事件を思ひ出して、苦笑するのである。

青い虫

四年 相場慶次

夜風が涼しく明け放した窓からは入る。勉強を始めてから小半刻も経つたらう。「ブン」と電燈の笠に衝突して微かな音を立てたものがあつた。見れば青い小さな蟲だつた。それが何といふ名の蟲か私は知らない。がそれで白い笠に青い一點を生じて美しい。然しその一點は直ぐ動き出した。笠の白いふちをぐる／＼廻つた。蟲と笠の色の對照——又その蟲の動作によつて私は一種の興味をそゝられた。ぢつと見てゐる蟲は相變らず小刻みに動く。丁度公園をぶら／＼と散歩しながら世の中のすべてを忘れた人の様に、如何にも楽しさうだ

僕は腹の王合が大分よくなつて歩けるやうになると、毎日の土間へ必ず二度は出て来て、五つ六つの西瓜の中から自分を選んで此の西瓜の傍へ蹲んで、これを食べる時の楽しさを想像しては獨りにこ／＼して居た。そして規則正しく莖の附根から尻へ置かれてゐる濃い縞を見ては、此の筋の通りに半月の様に切らうかと考へ乍ら、つる／＼滑る肌を撫でては、早く此奴を食べる日が來れば良いと思つてゐた。その中に僕の身体も次第に回復したが、それにつれて西瓜の數も減つて、とう／＼僕のあの西瓜だけになつたのである。そしてもう明日にでも食べられると云ふ時になつて、僕の大きな楽しみをあつけ無く摘み取られた一大事件が起つた。

それは不意の來客があつて、僕のあの大切な西瓜が、其の客の咽喉を潤ほす可く無断に用ひられて終つた事だ。その時は僕は裏の庭で蟬を掴まへて遊んで居たので、西瓜が切られるのは見なかつたのだ。少し後に母に呼ばれて台所へ行くと、あの大事の西瓜が細かく切られて並べられてあるのが目に入つた。よく熟れた眞紅に近い果肉が黒い種を幾つかへばり附けて三角の頂を並べてゐる美しさ、見るからに食欲ものだつた。然しその時の僕にはそんな美しさも目に入らなかつた。「あつ！ あれ切つてもたんか！」と母の顔を、顔中一ぱいに非難の色を表はして見つめた。母は「うん、一寸急な御客さんがあつたのでな」。さあ、あんなに待つて

と思はれた。と、突然その蟲が飛んだ。「おやツ何處へ」と探す私の眼にすぐ認められた。青い小蟲は私の机を漫歩し始めたのだ。盛んに歩き廻る。時々蟹の様に横に這ふ。

六本の足を素速く巧妙に動かして歩く。そしてそれはだん／＼と私のノートの近くへ來つた。此の青い小さな蟲は何處から來るのか、毎夜の様に何時も二匹は私の夜の勉強中に飛んで來るのであつた。そして私は何故今夜に限つてこんなにこの蟲に興味をひかれるのだらう、と不思議に思つたその中に蟲は遂にノートの上に這ひ上つた。そして更に前進を續けた。かさ／＼かさ／＼と微かな音をさへたて、小蟲は前進を止めない。依然として進む。ノートの括り目もこえて、大きく上つた山も越えて。私の眼はこの小さな蟲を追跡した。そしてその追跡の眼はノートの字の上にと及んだ。「あつ、しまつた」と思つた。青い小蟲にとらはれてつい勉強を忘れてゐたのだ。この青い小さな蟲が私の時間を盗んだのだだからこそ極刑に處すべしと私は判決を下した。で、私は手を伸べてその蟲を指先で軽く抑へ、思ひきつて壓力を加へた「ブチツ」と微かな音をたててその蟲の一生涯は終つた。此の世の名残りに眞白い紙の上に青茶色の斑點を残して。然しとう／＼大自然の一つの生命を殺してしまつたのだと思ふと餘りよい氣はしなかつた。

友へ

四年 伊藤 彌平

窓邊の青桐の青葉が陽に透いて動く。西日が目に眩しく痛い。もう夏だ。正面の丘には夏草が伸び繁つて撫子の花が一面に咲いてゐる。

君には三年間も音信を絶つてゐた僕だ。君と別れて夢のやうに過ぎ去つた月日を考へながら、フト君に手紙を差上げた氣になつた。

僕は今田園の夏に對してゐる。君は君で都會の夏を味つてゐるだらう。田園の夏——よく君と一緒に出かけたあの丘だ花をとり、釣糸をたれに、時には夕風の中で聲はり上げて教はつたばかりの陶潜の詩を吟じたり、あの頃をなつかしく思ひ出す。思ひ出の丘が思ひ出の夏となつて君へ手紙をと思ひついた。

あれからどん／＼日が経つた。僕には平凡な單純な日が流れた。時には遊惰に陥入し自身に鞭打つことも忘れて日が流れた。今中學の四年に居るは居るものあまり芳ばしい成績ではない。僕の好敵手であり、よき友人である君が傍にゐない。現實の私の世界に君がゐないので、私の心はつい油断を氣で通學してゐる。小學校時代の友達は誰も彼も商家や都會地に出てしまつて、家に残つてゐるものは僕位のものだ。圓城溜の菱の實も夏が來てもとつてくれ手が無いので淋しがつてゐる。

君があちらへ行つてから召集令が度々來て馬車ひきの庄ちゃんも煙草屋の貞さんも皆元氣で出征せられた。去る天長節の日には青年團の運動會があつて、御存じの竹原と點を争つて遂に二點の差で勝つた。八百メーターのリレーでは全くヒヤ／＼させられた。在郷軍人もまだ相當ゐられるので安心なものだ。

君の家はお父さんもお母さんも妹さんも達者で暮してゐられるから安心して欲しい。先日君のお手紙をお父さんが僕の處へ持つて來て、「この手紙を読んで見てやつて呉れ」と言つて置いて行かれた。その手紙で内地と違つて想像以上の悪天候と寒氣とを知り、そこで君がよく頑張つてやつてゐるのには感心させられた。

僕も君のことを思つて人一倍頑張つて相當な成績をあげ、人生を華々しく進みたいと思ふ。今のところは、努力、努力で突き進む考である。君も體に氣をつけて病氣に罹らぬやう又暇があつたら手紙を呉れ給へ。さよなら。

して、思ふやうに運ばぬ身の實力に悶え、深刻に悩んでゐる君は素晴らしい成績を舉げてゐるだらう。など考へると、慄然とする。三年の月日が悔まれもする。今日は君を思ひ出して意り勝ちな自己を省み、君によつて僕が更新する機會を與へて貰ふんだと決心した。どうか近況を知らせて呉れ給へ強い鞭撻の手紙を惠んでくれ給へ。

鞏固なる意志を熱烈なる意志を內的妄想に打克つ唯一の武器とする——と。惱みの末には努力してゐるのだが、未だ白痴的感情の域を脱しない。笑つて呉れ給へ。

君と僕との間は、三年前にあの丘で結ばれた昔のままの感情であらうか、願はくばいつまでもさうでありたい。君の御自愛を祈る。切に祈る。兎に角、三年間音信を絶つた僕を諒として手紙を呉れ給へ。

もう四邊は夜だ、月光の淡き窓だ。庭の樹に螢も光つてゐる。さよなら。

異郷の友へ

四年 中村 博

滿蒙開拓義勇軍——大きな望を抱いて勇躍參加して君が出發されてから早や一年になる。變りは無いかね。僕は頗る元

昭和十四年を送る

四年 土田 榮俊

昔徳川頼宣は吾に再び十四歳の時ありやと言つたが、過ぎゆく昭和十四年も僕にとつては最早一生涯に二度と訪づれない一箇年ではあるがその昭和十四年も今將に終らうとしてゐる。顧る中學第四年時代——それは非常に愉快な元氣で過せた一年であつた。よく遊びよく運動し、と此の一面では世の幸福を一身に浴びて楽しく暮して來た。と言へるが、勉學研究ではまだ／＼の感慨が深い。過ぎ去る一年はあまりにも早かつた、再び來ぬ一年を無爲に終るかの心にもなる。毎朝自轉車で登校の途上冬ざる、四方の景色を眺めては今年も日一日と暮れてゆくのかと思ひ、非常に淋しい殘惜しい氣持ちがする。が又一面に於てどこか微かに喜悅が感じられる様なのは何故だらう。淋しく考へられる其の反面には思ひを前途に轉換すると昭和十五年と云ふ新しい光明の世界が大手を擴げて我々を待ちうけて抱擁せんとしてゐる、來年を待つ心である。昭和十四年より一步進んだ大きい天地が時代が我々を待つてゐてくれる。昭和十五年こそわが大和民族一億の民草が待望の其の光榮ある有意義な紀元二千六百年である。事變下

で國家國際問題は一層複雑になるであらうが、この光榮ある記念の年は我々にとつて新しい日本の幸福を囁いてくれる。この日本の此の光榮ある二千六百年に生れ合せる事の出来る事、これが逝く年を惜むよりも、それとは別により待ち遠しい。來年の三月には五年に進級する。我々の彦中生活は來年一箇年で其の扉を閉すのだ。あと一年。最終學年であるこの一年を如何に過すべきか。勿論勉強にいそむ積りだ。今日迄の私の實力は未だ充分とは云へない。來年こそは自分の全力を揮ひ、揮ひ盡し得た一年としてどうしても眞の實力をつけなければならぬ。残る四年の三學期及び第五學年の期間がそれだ。この光榮ある二千六百年に浸つて之を祝福する意味は全力を盡して勉學に運動に精勵し以て興亞の日本を背負つてたつ立派な日本人たるの自分を效すべきことである。中學時代最後の仕上げを心に誓つて僕は今迄にない緊張裡にこの昭和十四年を送るのである。

勤勞奉仕

三年 藤田 行三

畏くも御親閱を拜受し、優渥なる勸語を奉戴して非常時局下の我等學徒が心身を鍛練して以て一意 聖旨に添ひ奉らむ

目もあやな博覽會の正門だ。極彩色のあでやかさは龍宮城を訪れたかと怪しむばかり、假に「興亞門」とでも名づけようか。入ると正門に吳淞砲台の巨砲が周圍を壓して控へてゐる。吳淞砲台はいふまでもなく上海の咽喉を扼する堅陣である。過ぐる昭和七年の上海事變並に今次事變に於て、この砲台の占據に向つた我等が郷土勇士の精銳が幾多の尊い鮮血を流した事はまだ記憶に新たな所である。その他この廣場一面に八種高角砲、十種砲身等の大砲を初めソ聯製E十六型機・重爆機・大別山越えの時分挿つた輕戰車等が皇軍の勇猛と苦闘とを物語つて据ゑつけられてゐる。眼を右にうつすと馬上豊に三軍を叱咤してゐる。〇〇部隊長の颯爽たる像があるが馬の高さ一丈五尺、振りかざしてゐる日本刀の長さ九尺といふ大きなものである。「英靈感謝館」に入れば中部日本一府十二縣下の殊勳甲並に海軍優賞者を中心とした戦死者の寫眞並に遺品が陳列されてゐる。「銃後報國館」で防空の知識を養はれて「海軍館」に入れば再び絢爛なパノラマが展開する。奇襲上陸によつて廣東の死命を制する因をなしたバイヤス灣の敵前上陸。バイヤス灣の南溟の海南島がそれである。吳鎮守府出品の精銳の諸兵器を見終つて表へ出れば目前に楽しい「子供の國」が待ち受けてゐる。戰車や飛行艇に乗つて戦線を廻る面白さ。鐵條網あり、トーチカあり、クレークあり、さながら戦地へ行つた氣分である。第二會場に入れば右手に宏壯

ことを誓ひ奉るの時、本校々地擴張工事の爲に勤勞奉仕の作業を行つたことは何といふ意義の深いことであらう。

その日は朝來日本晴、体操服ゲートルに身を固めた第三學年生徒二百餘名は、定刻八時大公孫樹下に集合嚴かな開始式を擧げた後作業を開始した。

無言の行は進んで行く。唯、蹴、スコップの音がカン／＼、ガチャ／＼と響きわたる。見る／＼、山は崩され、溝は埋められ、道路はつぶされ又作られ、樹の根は掘られ、石は集められて小山となる。唯一黙々たる汗の中に仕事はズンズン進捗して行く。

かくて午前十一時、先生の講評を承つて一先づ我等の作業は終了した。努力の汗を拭き精進のあとを顧みて、微力ながら我等のこの汗が遂には美しい我等が學校園となつて永遠に記録されることを想ふと嬉しくてたまらない。完成された前庭——美しい花壇——を心に描きながら歸途についた。

興亞大博覽會を見て

三年 江波彌太郎

電車を笹島町で降りて先づ驚かされたのは碧空に聳立した

な建物「大陸資源館」がある。中に入れば興亞の理想に向つて生々たる息吹きを續けてゐる大陸の全貌が美しい色彩を持つて盛り上つてゐる。國際都市上海・維新政府の所在地として興亞の實現に逞しい成長を遂げてゐる。かつての敵首都南京。さては花のバリーと稱される詩の古都北京。萬壽山の風景。大同の石佛寺の風景。更に蒙古・滿洲・朝鮮等興隆日本の齎した飛躍的發展の現勢は餘すところなくこの一堂にあつめられ、輝く明日への行手を示してゐる。

あゝ、皇軍將士の御奮闘と幾多の尊き犠牲により神國日本の光を浴びて眞の建設へと導かれ行く大陸の黎明。一通り見終つた僕は唯々感激の極み、いひ知れぬ緊張を覺えると共に我等若人の尊き使命を一入感銘せざるを得なかつたのである。

武道こそその精神

三年 堀 惣 英

かつて獨逸のヘンリー親王が來朝せられた時、日本の擊劍を見て「之で日本がロシアに打勝つたわけが分つた」と言はれたといふことである。親王は竹刀の尖端より發する武士道其背後に籠つてゐる日本魂を感ぜられたのである。

武道では相手を殲すだけが目的ではない。相手が技を掛け

て来るのに身構へるとき、その心は自づと静まり、その胸中には一所にも外の考へはなく寸分の隙もない周到な構へと何物も倒すといふ此の上もない力が溢れる。そしてその精神で技を掛けると渾身の力は一途にかゝり、應機の変は鬼神の窺ふをも容さぬ貴い心境となるのである。

武道では勝負の問題は二番目だとは常に聞いてゐる。それで見事に勝を相手に譲つても少しも残念に思はない所が更に大切である。武道は日本魂の發露である。

僕はこの引しまつた貴い心境をいつも持ちたいと思ふ。

日本精神

三年 久木幸男

明治維新以來七十年、其の間我が國運は駭々乎として日に進み今や日本は世界三大強國の一となつてゐる。明治、大正の時代専ら西洋文化を取入れるに汲々としてゐる我が國は、今や西洋の模倣を捨て、東洋精神文化をもととして新しき文化を創造する段階に這入つてゐる。かくて我が國威は海外に耀き我が商品はメイド・イン・ジャパンの名と共に世界各地の市場に進出した。滿洲事變發生以來勃然として起つた我が國民の國家的意識と、所謂物質偏重の西洋文化を捨て、我

四〇

が國固有の精神——即ち日本精神を中心とする思想とは益々我が國民の協力を固からしめ、滿洲事變後の非常時局に善處して來た。今時の事變發生以來、國民の燃ゆるが如き熱烈なる愛國の念は、或は忠勇鬼神を哭かしむる勇士の働となり、或は固き銃後の護となつて現はれた。一億國民の齊しく持つる我が日本精神は、かゝる非常時下に於て燦然たる光彩を放ちつゝあるのである。

將來我が國の前に如何なる試練の嵐が吹き荒び、如何なる國難の怒濤が押寄せて來ようとも、吾等は常に日本精神によつて之等の困難をうち破つて邁進するのみである。弘安の昔我等が先祖が蒙古の大軍十五萬を筑海の藻屑と化せしめたのも、近くは日清、日露の役に我が國威が八紘に輝いたのも皆此の日本精神の力である。私達の胸には脈々として遠き祖先以來の日本精神が傳つてゐるのである。今後日本が發展し、世界平和の盟主と成るのは要するに日本精神の發揚に他ならぬのである。

世界は明けむほのくゝと

神の國なる東より。

實に私達は私達の胸に生きてゐる美しい彥中精神を生き抜くことにより、彌々日本精神發揚の爲に邁進するのである。

感激の胸を抑へてふと見上げると中空の名月は眞如の姿に透徹してゐた。英靈の冥福と戦線の武運長久の爲に靜かに黙禱を捧げて机に向ふところほろぎの聲がま近きこえた。

名月

三年 國友武夫

秋も酣となつた。名月の光を浴びて欄にもたれた僕の心は早くも大陸に馳つてゐた。

内地でかうして眺める美しい月は、大陸では壱塚内の皇軍將士を照してゐることだらう。激戦又激戦、終日の奮闘を終つてふと名月を見上げたひととき、定めし故郷の山河が壱塚内に描かれることであらう。

支那事變は正にこれからだ。歐洲は再び亂れた。世界は又もや動かうとしてゐる。皇軍將士の壱塚をそのまゝ引受けて興亞の聖業達成の爲に進撃する任は我等の双肩にあるのだ。

折も折、我等が學園には、勅語奉戴並に紀元二千六百年記念事業の一つとしてこの度養正館が開設せられ、恩師千原先生始め十七先輩英靈が、武勳の血潮も生々しい遺品と共に母校のこの養正の一堂に歸り會されるを待つて嚴肅に開館されたのである。我等九百の後輩は、この護國の先輩英靈の前に盡忠報國のあかき血しぶきの前に頼いて、學園傳統の精神をそのまゝ實踐された先輩道に感激し併せて後輩の道をあやまらず邁進せんことを誓つて、英靈の冥福を祈つたのだ。

青少年學徒に賜りたる 勅語を拜讀して

二年 佐野勉

五月二十二日、畏くも 聖上陛下におかせられては宮城前廣場に於いて、全國の青少年學徒の代表者を御親閱遊ばされました。そしてその御親閱の御後、恐れ多くも優渥なる御勅語を特に吾等青少年に賜うたのであります。かくの如き有難き御事は實に開闢以來未曾有の御事だと思ひます。我等第二國民たる者は此の有難き 御聖旨に感謝し感激し奉り、日々の業務に勵まなければなりません。その御勅語の中に國家を益々隆盛にし、我が大日本帝國の名譽を維持して行く者はお前達であり、その大任はお前達の雙肩に懸つて居るのだと御諭しになつて居られます。此の有難い御言葉を拜讀して、どうして奮起せず居られませう。我々は此の有難い大御心を拜し奉つた以上粉骨碎身切磋琢磨、徳を積み智を磨いて以て廣大無邊の 御皇恩に報い奉る様掛ければなりません。

四一

此の超非常時に際しては益々國力を養ひ、國の基を固くすべく、第二國民として恥しからぬ行をしなければなりません。否、さうするのが當然の義務であります。然し身体が弱くては何の役にも立ちません。我々は常に衛生に注意し、適度の運動を忘れず、身体の鍛錬に心掛け、以て眞實剛健の氣風を涵養せねばなりません。國家の總力戦はまだ何時まで續くか分りません。吾等青少年が社會に出る時こそ此の現時の難局を整理解決する時でせう。吾等にはその大責任があります。その大責任の立派に果せるやう大いに心身を鍛錬しておかねばなりません。

魚釣り

二年 佐野 孟俊

長閑かな春の光に誘はれて、清鮮な大氣に觸れようと、釣りに出かけた。お宮の裏の木蔭を流れる川のほとりに、黙々と釣糸を垂れ、唯じつと水面の浮子を凝視してゐる。と浮子が動き始めた。見る／＼水中へ沈んで行く。呼吸をはかつてグツと竿を上げて見ると、二十糎程の魚が木蔭からさし込んで来る太陽の光に照らされて、銀鱗をキラ／＼と輝かせ乍ら跳ね上つた。思はず微笑が浮ぶ。急いで魚を針からはづして

四二

魚籠へ入れると、餌を取換へて又水に糸を垂れた。そよ／＼と吹く春風に櫻の花片が二つ三つ舞ひ落ちて、流れるともなく靜かに水面を漂つて行く。春の日射に萬物は暖かな日光を受けて生々としてゐる。が此處の木蔭では未だ時々冷たい風が肌に觸れて冷々と感ずる。あ、又浮子が揺れる。今度銀鱗を躍らすのは何か。餌に釣られる魚獲蔣各國に操られる蔣介石の運命も之に似てゐるのではなからうか。色々の事が走馬燈の如く頭の中をゆき／＼する。

ふと氣がついて見ると、太陽は早や西の彼方に沈まうとしてゐる。僕は急いで家へ歸つた。釣糸を垂れてゐる間はすべての感じが和やかに、心が靜かに清々しくなる。だから僕は釣が好きで時々出かける。

舉國一致

二年 西川 吉太郎

一本の矢は容易に折ることが出来るが、二本三本となると容易に折ることが出来ない。これは古人の戒であるが、何時になつても變らない尊い訓である。我々一人々々は極めて微小な力しか持たないものである。この小さい力を持つ人々が各々勝手勝手な我儘をし始めたら、假令國に數億數十億の民濁つた空氣が、空一面に立籠めて、ぼんやりした頭腦を再び眠の國へ取戻さうとする。其の度に急にさつ／＼といふ聲が起つて、僕の頭腦を現實に歸らせた。始めはそれが何であるか判らなかつたが、老がはつきりして来るにつれて、霞の晴れ渡るやうにだん／＼と心に浮んで来た。

カーテンを引いて見ると、形の有るか無いか判らぬ、如何にも軟かさうな春雨が、鉛色の空から降つて来る。空は手を入れて掻き雜せる事が出来る如くに近い。木々は偉大なる自然の力によつて、新たな衣裝をつけ、甘露に慣する春雨を受けて、つや／＼とした若葉が天に向つて、生の喜に戦いてゐる。折しも雲間を破つた朝陽が、燦爛たる光を若葉に注いだ。

太陽の光熱は衰へたといふ。然し我等が見る太陽は年が年中同じだ。悲しい時は慰めて呉れ、嬉しい時には共に喜んで呉れ、尙又、毎朝潑刺たる希望と純正なる精神とを與へて呉れる。其の雲を破り出る勢や、其の空に昇る勢は、悉く我々を導く光明である。何時しか雲も太陽に恐れをなしたか、遙か彼方へ去つてしまつた。清く澄み渡つた青空に燦爛たる太陽を、此の日本の國に仰ぐ時、誰か朝の喜を、日本國民たる喜を感じない事があらうか。何時の間にかしつかりと握られた拳を、思ひ切り伸して、希望の叫びを大空に呼びかけた。

があつても、その力は實に薄弱なものとなる。反對に如何に弱い個人でも、二十人三十人といふ人達が固く結びついて行動したら、そこには容易に破ることの出来ない力が生れる。我が國民は一億を超えてゐるといはれてゐる。今日、此の一億の國民が一致協力、以て國家の發展のために努力してゐるため、世界に比類なき國威を顯揚してゐるのである。然し一旦各人が心のまゝに勝手な行動をとるやうにでもなれば、それこそ我が國は我々が曾て夢想だにしなかつた所の弱みを表はさないではあられぬだらう。

幸に振古以來我々の先祖は一朝事ある時には、舉國一致、以て君國に身命を捧げるの實をあげるを常としてゐる。現在に於ても我が國は開闢以還未だ曾て見ざる所の非常時局に直面して居るのであるから、益々舉國一致を堅實にし、且建國の國是を恢弘し、而して帝國の威光を全世界に輝かさねばならぬ。

朝

二年 中山 英男

あたりが何となくしつとりと濕つてゐる。枕邊の時計は將に四時を打たうとしてゐる。飽くまでも靜かである。其の上

四三

勤勞奉仕

二年 吉居 清

八月二十二日勤勞奉仕の日だ。僕等は定刻までに登校、直ぐ作業の出来る服装になつた。サイレンの合圖で運動場に集合、宮城遙拜勅語奉讀等嚴肅な開始式の後、作業は開始された。庭を見渡すと、上級生の人達が運ばれた砂が澤山積まれてある。僕等も此の校庭を美しくするのだ。鍬畚塵取等の道具を持って来て校庭に集合。先生の作業に對する御注意の後仕事を始めた。

僕等の仕事はもと竹藪であつた所の竹の根をすつかり掘起して庭園になつた時、竹が生えない様にする事だ。向ふでは鍬で土を掘つては畚で運んで、汗だらけになつて働いてゐる車隊は今しも犬上川まで砂を取りに出發しかけた。僕等竹の根掘隊も一所懸命だ。深く掘つて前へ進みながら見つけ次第竹の根を後へ投げる。塵取の者が後でそれを拾ふ。日がじり／＼と照る。黙々の中に仕事もだん／＼捗る。どちらを見ても皆一所懸命だ。太陽は大分上つて、益々暑くなつてくる。喉は乾く。段々身体が苦しくなる。が併し、皇軍將士の方々は支那の炎熱下に於て、命を捧げて大君の御爲、國の爲に働

四四

いてゐて下さるのである。我々は辛いなどと云つては兵隊さんに濟まないのだと、心を勵ましながら働く。かくて作業は午後二時半に終了した。校庭を眺めると、朝眺めた時とは大分違つてゐて、今まで少ししか無かつた竹の根は堆く積まれ、穴の土は深く掘られてゐる。僕は協同の力の偉大なることを今更ながら痛感すると同時に、仕事をすることの興味をしみじみ味はつた。

空の護り

二年 窪田 耕治

すは、敵襲！兩國の國交斷絶となり、宣戰布告となれば空中戦から始まるだらう。「日本は神の國である。滅多に敵の爆撃機は國內に入れないだらう」然しさうとは斷言出来まい。北には某國がウラヂオストックに長距離用爆撃機を用意し、虎視眈々として隙を窺つてゐる。又東には某國が日本を假想敵國として牙を磨いてゐるのだ。日本の空軍は強い。各國の空軍なんかには負けてゐない。併し若しも、敵飛行機が大編隊で日本を空襲したらどうだらう。そしてその中の一機でも我が戦闘機の目を逃れて、我々の頭上に來たとすれば、一機の爆弾の搭載量を二千疋としても、それから蒙る損害は

非常なものである。

我等が郷土滋賀縣は日本第一の湖を擁してゐる。それは敵機には最も善い目標である。ウラヂオストックを飛出した飛行機は四時間もすれば我々の頭上に飛んで來る。實に恐しい事だ。殊に日本の家屋は木造が多いから火に弱い。蟬氏二千度以上の高熱を發する焼夷彈を落されたら見る／＼中に火の海と化してしまふだらう。又毒瓦斯劑も必ず撒かれるだらう。複雑怪奇な國際狀勢の現今に於ては、我々は寸時も油断してはならないのである。

空の護りの必要はこゝにあるのである。燈火管制、防火用の土砂、水の設備の必要もこゝから生れて來るのである。空襲警報中に一燈を漏らす不心得者があれば、その村、その町は一瞬にして焦土と化してしまふのである。燈火管制は實に銃後國民の大切な義務である。我々は常に防空智識を豊富にして、この大切な責務を果さねばならない。

夜道

二年 重森 守

かち／＼と、夜廻りの拍子木の音が遠ざかつて行く。隣村まで兄を送つて行つての歸途、既に十一時に近い。

細い三日月が必死に照らす街路も、黒い帳に覆はれてどす黒い。かつかつと、下駄の音のみ淋しく響く。漸く暖に達した。此の暖を越せば僕の村であるが、此處には電柱に街燈も無い。深閑とした松並木である。終列車の汽笛が聞えて來た空の星も疎だ。今にも松の蔭から辻斬りが、拔身を提げて飛出しさうである。試膽會の夜を思ひ浮べる。歌を唱はうとしても聲も出ない。と、さつと背筋に寒氣がした。化物！妖怪！あらで、眞黒な野良犬が後から飛出して、ちらりと振り返つて再び走り去つた。初秋のそよ風も地獄の生臭い風の様我感到。普通ならば願みもしない松を、一本二本と數へて淋しさをまぎらして行く。約三十本程數へた頃、村の燈がぼんやりと見えて來た。戦く足を踏みしめて、やつと村の端の水揚場へ着いた。先程の犬が塵箱の中へしきりと頭を突込んでゐた。五十米程行くと杉垣のある所へ來た。此處は昨年村人達が火の玉が出ると騒いだ所である。今にもあやかしが飛掛つて來さうな氣がする。僕は夢中で目をつむつて走つた。やつと目を開くと、家の近くの鳥居に達してゐた。落着を取り戻して家へ入つた。

家を出る時あれほど騒いでゐた弟は、もうとつくに寢て、家は静かであつた。寢床に入ると恐しさを忘れて寢てしまつた。

初冬の夜

二年 樋口 滋

風は戸をがたゴト／＼と鳴らして居る。裏へ出た。恐しく月の冴えた夜だ。寒い冷い光を下界に放つて居る。風は月を吹き飛ばさんばかりに吹いて居る。既に葉の落ち盡して居る柿の木には、酸漿色に熟したつや／＼しいのが二つ三つ、月光を浴びて美しく輝いて居る。見て居る自分の手は凍るやうだ。寒風は容赦もなく我が身を吹きつける。盆栽棚の上に載つて居るいしやいらすや葛は、冷い風を身に受けて顫へ上つて居る。此の間まで庭を美しく紅に彩つて居た楓も、今は活氣を失つてぼんやりして居る。時折栗の葉が飛んで来て、茫然と立つて居る僕の身體に當る。裏山の木々が揺られて、庭に投げんとする葉をさわ／＼させて居る。庭の花と云ふ花は屍を地に晒して居るが、獨り山茶花のみは今を盛と咲き誇り、眞白な花を月光に輝かせて居る。

古諺に「時は金なり」とか、「光陰は矢の如し」とか言ふのがある。僕は時間を浪費するやうな事がある度毎に、此の諺を思ひ出しては慚愧に堪へないのである。古、我等が郷國志賀の部に眞都し給へる英帝天智天皇は、畏くも本邦最初の時計を御自ら御發明になり、時間嚴守の好範を垂れさせ給うたのである。御ゆかりの地滋賀縣に生を享けた我等は、一層時を大切にしなければならぬ。

念日に當り、我等は今一層時間を大切にする觀念を養はうではないか。

僕の伯父様

一年 安田 英夫

五月十五日、丁度氏神様の春祭の日だつた。母は關東旅行で不在だつたし、その日にかぎつて、家中早く床についた。午後十時過、突然、「どんどん」あわたたしく戸をたたく音僕は、はつとしてはね起きた。外では、「安田さん電報々々」と、續いてのけたましい聲。何だらう。と思ふ瞬間、僕はぎよつとした。いよいよ來たなと、思つたが此の前だまされてをるので、「まさか……」とは思ひながらも手は激しく震へてゐる。いそいで戸をあけた。胸が高鳴る。父も祖母もあわたたしく出て來られた。まづ父が開いて見た。「タカヲンヨウシウ 一七ヒ 三三ニウタイ」すぐ父から、電報を受取つて見た。間違つてゐないかしら。僕は穴のあく程見つめたやつぱり、間違つてはゐなかつた。

急に家中がざはめき出した。親類へ電話を掛ける。女中が時間表を買ひに走る。父は自動車を呼ぶ。お祖母さんは、着物を着かへる。家中はまるで戦場の様にこつた返してゐる。

時

二年 谷 怜道

すぐ自動車を走らせて出て行かれた。今晚の十二時の急行を乗りおけると、明日の伯父様の晴れの門出に、間に合はなくなるので父が心配してをられた。急に淋しくなつた。小さい弟は何も知らずにすやく／＼と眠つてゐる。僕は伯父様の事が思ひ出されて、なか／＼眠れなかつた。

それから一年餘、機關銃隊の小隊長だつた伯父様は前方で陣地選定中無念や敵弾は腹部と左肩にあたり、今は京都の陸軍病院で再起の日を待つてをられる。始めて母と面會に行つた時、僕はびつくりした。肉のもり上つたりつばな体格は、養分の減退のため骨と皮の如く、左肩負傷のため左手が板の様に薄く、一人では寝台の上へ起き上れない程であつた。それでもやつぱり僕がかはいのか實戰の話をして下さつた。又野戦病院で手術の時出した弾丸も見せて下さつた。

この間僕が中學に入學したので大へん喜んで下さつた。そして二百人の新入生が白紙でスタートを切るのだから、格別

がんばれと勵ましのお手紙をいただいた事、そして一學期の成績をたのしみにしてゐるとの事。それらが今新たな興奮となつてよみ返つて來るのである。僕もがんばらう。しつかりやらう、伯父様の事を思つて一心にやらうと思つた。

田園

一年 北村好夫

チリン／＼と自轉車のベルが氣持よくあたりにひびく。ハンドルを右へまげて縣道へ出る。まだ新しい道なので小石があつて走りにくい。しばし走ると田園の間に出た。道端の若草が生々とのび出てゐる。風は殆んどない。太陽がうら／＼かに田園に百姓家に照りつける。背中が大分暑くなつて來た。だがあたりの景色によつて、さして強く感じない。

僕は兄に話しかける。「たんぼ道を自轉車で走るのもえゝなあ」と。だが兄は「うん」と言つたきりあたりを見まはしながらペダルを強くふんでゐる。

又道を左に曲る。前の道よりも此の道に入つてからの方が僕に田舎らしい感じをあててくれた。粗末な葉ぶき小屋、あちこちにある林、向ふに連なる山々等。小川に沿うて走るさら／＼と流れる小川の水に川端の草がうつつてなほ一層きら

せながら早くも着いた。驛員のいひふれる養老驛の聲。下車すると早速バスに乗つた。バスは傾斜道路をかなり快よく走つた。靜かな落着いた所だなあとおぼやきながら、外の光景を眺めて居た。バスに乗つてゐるのも束の間、三人はバスを下りた。

「先生あまり美しくはありませんね」といふと小學生の時致へて下さつた先生は「うん今は櫻や紅葉がないからでせう。しかし春秋はとても美しいね」といはれる。僕は春や秋に休みがあるといふなあと思ひながら足を運んだ。

歩むにつれてあたりは仙境らしくなつてくる。「一向瀧の音もしませんね」と問ふと「まだ。約三丁程行くと聞えるでせう」といはれる。餘り涼しいので夏の氣分を忘れるくらゐだつた。茶亭を横切つてから四五十米行くと、瀧が見えた。櫻や紅葉の老樹を通して、糸をひいた様に、上から下へ走つてゐた。僕は足を早めた。瀧もみるみる大きくなつた。と見るまに瀧は目の前五六米の上空から、水晶のすだれのやうに落下してゐた。

先生も僕も瀧に心を惹きつけられた。「では歸へらう。こんどは道をかへて行かう」すこし早めに道を下つた。途中養老神社に參拜した。其の横に元明天皇の行幸なさつた由緒の泉がこんこんと湧いてゐた。僕は孝子の話を胸にうかべた。

れいに見える。家の近くの木にまじつて櫻の花がらんまんと咲いてゐる。又梅も咲いてゐた。眞赤な少しくどい色の椿も咲いてゐた。やがて道がわかれめになつて、どつちに進んでよいのかわからなくなつたので、そこに働いてゐなかつた百姓さんに聞いた。腰の手拭で汗をふきながら、左へ進んだらよいと答へて下さつた。「ありがたうございます」と言つて言はれた通りに進んだ。あたりのたんぼは掘りかへされた所もある。又今掘りかへしてゐる所もある。錨がきらりと光ると、黒い土があらはれる。やがて目的のお寺についた。兄さんが荷物を持つて中へ入つて行かれた。しばらく待つてゐると又出てこられた。

又田園の間を走る。あちらこちらに百姓さんが働いてをられる。田園の間に立ち働く人は少しも遊ぶひまもない。たゞこつ／＼と自分の仕事をやつてをられる。僕はそれを考へると、新しい生活上の知識が得られたやうに思つた。大空には鳶が輪をかきながら舞つてゐる。

養老

一年 奥野文雄

養老へ行くのだ養老へ行くのだとおさへきれない胸をおど

伊吹登山記

一年 万澤普彦

自轉車で山籠の粗末な旅館に着き、先づ一休みしてゐると電燈をつけてくれた。あたりには蚊がうなつてゐるので閉口した。露台へ出ると廣い／＼桑畑の端に月が今しも上がらうとしてゐる。ふうつと、後向くと今まで遠くから見てゐた山が目前に、大きい／＼怪物のやうに黒く物すごくそびえてゐる。「動かさざること山の如し」と云ひますがこの山を見て、「ふむ成程」と感歎した。いつもなら、夏休の午後八時と云へばもう寝てる頃だが今夜は、緊張してゐるので不思議に眠くない。しかし夜半から明朝までは起きてゐなければならぬから無理にも寝ようとするが寝られない。寢床へ這入つたり外へでたりして時間の立つのを待つ。外を中等學生、青年團職工、女學生、都會の人々が唱つたり、となつたりしてどん／＼上へ行く。杖をから／＼と引きつづつて……。さつきの月がもう頭の上へ來てゐる。「もう十二時だからそろ／＼行かうよ」とにぎり飯を一つ食つて出かけた。

白い道を少し行くと籠の社へ來た。こん／＼と湧く清水を一ばい水筒につめて、「こんな山ぐらゐ何だ」と云はんばか

りの元氣で暗い大木の下をうね／＼と登つて行く。大分長い間大木の下を歩くと、次第に小さい雑木林に變つて行き、今度ははつと眼界が開けた。一面草原である。目前には一合目スキー場の燈が見えた。これからは晴れやかだと思ふとうれしくてたまらない。まだつかれてはゐないが先づ一服だ。「すつと前の方に光が見えるのが長濱だ」と兄が言ふがどうもをかしいなと思ふ。米原驛がかなり明かるく見える。彦根はよく氣をつけるとほんのりと見える。麓を汽車が走つて行く。ただ呆然と景色を見てゐると、「さ行かう」と立ち上がる。すうつと上の方までランプの光が點々と續いてゐる。名古屋、江州、美濃、色々の言葉ががや／＼と聞え、中には大聲で唄ふ者も少くない。ちりん／＼と腰につけた鈴を鳴らし、て行く者もある。もうこの峠を越せば平ら地にならうかと思つて行くと、ひよこと又現れる。ほんやりと登つて行く中に平ら地へ出た。四合目である。行手の山は絶壁のやうに切立つてゐる。この急な坂をうね／＼と登つて行く。しかし今までとちがつて、すぐつかれ、みんなの呼吸がはあ／＼と聞える。草につかまつたり、赤土の道をつる／＼すべりながら、少しづつ登つて行く。何回も一服して何時の間にか八合目に來てゐた。ここが一番難所である。もう身のまはりには、花が一面咲いてゐるのであらう。そろ／＼冷氣をおびた氣が吹き出した。九合目と云へばもう頂上である。十合目はそこに

うぐひすが鳴いてゐた。

勤勞作業の感想

一年 若林健一

「八月二十五日」金曜 晴

意義ある我等の前庭の勤勞作業の五日間の第一日目である先づ宮城遙拜、爽かな朝風に吹かれながら静かに頭を下げるそれから青少年學徒に賜りたる勸語を一齊に奉誦する。次は國歌齊唱。黙禱、戦歿將兵並に皇軍勇士の武運長久祈願。續いて彦中体操二回。快速に手足が動く。それより作業に取掛る。皆が注意をよく守つて、而も残暑のきびしい最中に元氣に活動した。又僕等三組の受持である砂利通しは砂利運びが節の上にあけると一度に砂埃が頭からまるかぶりになつて非常にきたなかつたので明日からマスクを持つて來ると良いと思つた。

「八月二十六日」土曜 晴

第一日は過ぎ二日目を迎へた。開始式は何れも昨日より良く出來た。今日も暑かつたが眞面目に働ける能率が上つた。この作業で多勢の者が共同一致すると大きな仕事が出来るといふ確信を得た。

見えてゐる。石室のそばで腰を下してゐると、しばらくして寒氣が押寄せて來た。持つて來たメリヤスのシャツを着てもまだ寒い。七月三十一日が十月のやうだ。これではといふので茶店へ這入ると急に暖い。この家は屋根がとても低く立てば頭がつかへるくらゐである。このやうな家がいくつも建つてゐる。しばらく休んでゐる中にいつか眠つてしまつた。ふと目をさますと、あたりが騒がしくなつてゐた。「もう起きるか、日の出は五時だから飯を食べよう今四時半」と兄が言つた。にぎり飯を大急ぎで食べて外へとび出ると、昨夜は知らなかつた測候所がくつきりとそびえてゐる。今迄聞てわからなかつたあたりが一面眼に映つた瞬間、實に雄大明朗の感ぜられたのであつた。見渡す限り黄赤白緑色とり／＼の美しい花、今まで想像してゐたのと又別の感があつた。この美しい御花島には露がしつとりと降りてゐた。僕はもう歡喜にたへずそこら中歩きまはつた。谷間からは、ふはり／＼と雲が上つて來る。下には江濃國境なる高い山が紫も鮮かに何と美しい事よ、この雄大な美觀は筆舌にはどうしても盡し難い。西の方には大琵琶湖が鏡の如くなめらかに光つてゐる。東の方には山、谷、川、平野と霞の中に濃美平野は一望千里に見渡すことが出来る。朝の冷氣の中から見渡す景色は實に崇高である。色々の鮮かな眺めに見とれてゐる僕の頭はもう下山することを忘れてゐた。「ホーホケキョ」草むらの中に

「八月二十七日」日曜 曇後晴

朝は曇勝ちであつたがすぐ天氣になつた。一同元氣よく式を済ませすぐ作業開始。作業場所を變更したが他人の仕事を見て居ると樂な様だが此の作業も仲々骨が折れる。午後から城山の草むしりをした。思ふに今日は勤勞作業を始めてから三日目になるから追々と疲労も加はり緊張して居てもとかく緩み勝ちになるのに未だ一人の怪我人もなかつたことは非常に嬉しいと思ふ。

「八月二十八日」月曜 晴後曇

勤勞作業も四日目を迎へた。宮城遙拜の際に「きつとりつばに仕遂げます」と誓つて、一生懸命に働いた後の休憩の時にはよい氣持がした。健康上大變よいと思つた。日を重ねるに従つて疲労も加はるのでその困苦を拂ひのけて頑張り通した。

「八月二十九日」火曜 晴

いよ／＼最終日が來た。式は一段と嚴かさを加へた。作業開始。今日が終だといふので皆張切つてゐる。どん／＼能率が上がる。作業はお晝まで終つてお茶の席で感想發表。

この勤勞作業の五日間に我等は何を味つたか。健康。この腕を見よ。赤銅色になつた。堅忍持久の精神の鍛練。我々に取つて此の五日間は自分で自分を大いに磨いてくれたのだ。僕は喜んで感謝する。

勤勞奉仕の感想

一年 澤 信 夫

八月二十五日より五日間僕達一年生は夏休み最後の勤勞奉仕だ。歴史も又校舎も古い我が校に新しき校庭が恵まれ僕達一年生の立派な校舎はどつしりと出来上つた。今こそ前庭の荒地の大小大石を全校生の手で除き平地とするのだ。僕達の心はいやが上にも高鳴つた。上級生の人が順次に奉仕されもう大分平にせられてゐる。宮城遙拜をし嚴かな勤勞奉仕開始式を終へいよ／＼作業開始だ。鍬・塵取・園匙等が持出され用意は出来た僕等は作業に取りかかる。「カーン／＼」「ざあ／＼」と石にあたる音。土のくづれる音が青空に力強く響く。向ふでは「ガラ／＼ガラ／＼」と車で石を運ぶ者。皆一心に奮闘だ。かくして我等の新校地は著々と築き上げられて行く。僕等のこの小さい手でやがて前庭を完成さすの間もないだらう。

第二日

今日も昨日と同じ仕事だ。石をあげる者、土を砕く者、園匙で土をあげる者。皆夫々様々な仕事をしてゐる。作業も終り校門を出る時皆自然に振り返つて楽しい勤勞の跡を眺めるの

八月二十五日

國民の心身鍛錬がやかましく叫ばれてゐる折柄、我等の校庭を美化する勤勞作業を行ふことが出来るのは、眞に意義深いものと考へられます。

定刻登校先づ作業の開始式があつて愈々仕事が始まつた。

今日は僕達は土掘りと土運びをやることになつた。皆は元氣でやり始めた。僕も同じく負けないやうに元氣よくやつた。黙々としてやるといふ事は作業をやる前から決心したので。汗は瀧のやうに流れる。白いシャツは、汗と土ほこりとで黄ばくなつた。

八月二十六日

昨日と同じく皆は元氣よくやつた。仕事は著々と進んだ。澤山の土を掘つて、僕達の作業振りを遺憾なく發揮した。

八月二十七日

今日は仕事を交代した。僕の班は砂利篩をやることになつた。昨日までやつた土掘りと、土運びとに比べて少し軽い仕事だつた。皆の仕事振りは、昨日と變らぬ元氣だつた。

午後からは城の天守閣附近の草取をやつた。涼しい所であつたから、自らだるい氣持になる。各班で責任を分擔してやつたら大いに能率が上がった。

八月二十八日

強い風の爲に、ちりほこりが立つて僕達の眼や耳に入り、

だつた。

第三日

今日も晴天で勤勞奉仕にとつては立派な日本晴だ。今日は柿の木の側の土掘りだ。その左手はプールでも出来さうな大穴が掘られた。その穴を見て誰も感歎の聲を出しただらう。午後は城山へ草むしりに行く。

第四日

四日目の朝友達に言はれて見ると昨日中々倒れなかつた柿の木がばつたり倒れてゐる。どん／＼塵取に土を入れて送るのでどんと土がたまつた。向ふの方も高く積まれてゐる。

第五日

いよ／＼最後の五日目だ。あの大きな凹地も埋められ大きな柿の木も除かれ大部分仕上つた。もう少しだと思ふと一層張合がある。僕等は一心にお晝まで奮闘した。聖戦下の勤勞奉仕も無事終了した。僕等は皇軍と同じ精神で炎熱の下に鍬を打振つたのだ。この意義深い尊い汗の体験は僕達大きくなつても忘れぬよい思ひ出となるだらう。

勤勞作業感想

一年 雨森カルロス

少しなやまされたが、それにひるまず眞面目に僕達にあたへられた仕事をやつた。作業のすんだ後に皆の顔を見ると、ちりほこりの爲にきたなくなつてゐる。皆の努力のあとが見受けられた。

八月二十九日

今日は作業の最後の日であると思ふと、何となくむく／＼と腕の力瘤が脹れるやうに元氣が出た。最後の日であるからもうどうでもよいといふ事を考へないで「勝利は最後の一分間にある」との古人の言葉を繰返しながら仕事をやり始めた。皆の努力の結果で仕事は意外に早く進んで、お晝頃に終つた。午後は柔道場で菓子をかきながら先生・生徒代表の作業感想の言葉を聞いた。

此の五日間の作業の出来ばえを靜かに見る爲に、作業のあつた場所の前に立つた。あちらにも、こちらにも僕達の努力の結晶がはつきり見られる。これは永久に忘れる事の出来ない貴い記念品でもある。やがて校庭は美しく出来上るであらう。さうしてそれを眺める僕達の愛校心はますます深まることであらう。

勤勞作業感想

一年 垣見 邦男

第一日 日頃は激しい運動をしてゐなかつた僕だから、或は今日は一寸へたばるかなあ、と思ひ乍ら登校。果して思つた通りだつた。朝、運動場に並んだ時から既に気分が悪かつた。けれども其のまゝ第一回目を終り控所へ行くと、胸がむかついて眼と頭がくらくらつとす。あげさうなので便所へ行つてあげた。すると気分が餘程楽になつたので、その後もみなと共に作業に出た。併し今日の作業は大分苦しかつた。そして他の友たちの動きを羨みながら頑丈な體の必要さを痛切に感じた。

第二日 最初は土掘りで弱つて居たが、三回目に土運びの方に廻されたので大助かりだつた。此の仕事は随分忙しい。腹がすくので晝食のおいしいこと。今日も疲れたが此れは仕事の後の快い疲れだつた。

第三日 今日は役割の變更があり、僕は車で砂利の運搬に當ることゝなつた。此れは樂な仕事で殆ど汗が出なかつた。午後は城山で除草ごみ拾ひをした。仕事が變更すると、誰でも元氣が出るものと思へる。

五四

第四日 運搬では、車の積み方が考へ物だ。前の方に積み過ぎたり後の方に積み過ぎたりすると、勞力を多く費し、能率も又下る。困ることは車油が服につくことである。一寸突き出した物に引つ掛つても服を破る。又とげが刺つたりする。車を牽くことも相當につらい仕事だ。

第五日 今日で作業は終りだ、と思ふと、流石にやれと思ふ。休憩の時に車のそばに居たら、ズボンに引つ掛けて大きな穴があき、みんなに笑はれた。

此の五日間、随分激しい勞働をしたが、第一日目に弱つただけで後はさして疲れも感ぜずに働くことが出来たことは、喜びに堪へない。午前中で作業を終り、午後は勤勞作業感想發表會があつた。五日間の結果を省みて、大勢が團結して事を行ふ力の偉大さに、つくづくと感ぜしめられた。

勤勞奉仕感想記

一年 岸和田 基

八月二十五日(第一日目)

僕は始業の合圖と共に、校庭に整列した。人員點呼だ。誰も勢よく返事をして行くが、時々返事のないがある。一學年全生徒一つ心の勤勞奉仕に、缺席生があつたのは何とも遺

今日も式前に道具を出した。日が強く照りつけて苦しい。今日は昨日と變つて穴掘だ。前二組のした所なのだ。僕は始め圓匙で土を入れる役をした。しかし後に腕が疲れ息も苦しくなつてきたが戦地の兵隊さんを思ひがなはつた。後になるにつれてだん／＼要領がわかり早く出來た。僕等が柿の木を倒さない中にかはつたのはいやだつた。午後は城山へ草取りにいつた。雜草が繁つてゐる中を獸々と草を取つた。終つた後一望すると、僕等の力で刈取つた土地が何となく生きてゐるやうにほか／＼と感じた。

八月二十八日(第四日目)

勤勞奉仕も大分馴れてきた。然し少し緊張の解けた様な者もゐる。終までしつかりやりとげたいものだ。穴は僕等の掘つた所だけでも四・五十纏位ある。皆汗にまみれ眞剣に働いたので、非常に仕事が進み、怪我人一人もなかつた。疲勞の爲か終了式を待ちかねた。

八月二十九日(最終日)

もう半日でこの勤勞奉仕が終るので。この最後の日は無事にすこさねばならない。折からの風で、砂煙がもうもうと立つて、目を開けてゐられない。支那にゐられる兵隊さんの事を思ひ、黄塵漲る穴の中で一所懸命に土を掘つた、晝食を終へサイレンの音で控室整列、柔道場に入つた。感想發表會である。一列に並び茶碗、お菓子配る。先生、各級長の感

感であつた。開始式々中は、皆眞面目であつた。勸語奉讀、國歌齊唱共に大聲で皆元氣がみちてゐた。しつかりやらう。仕事は穴掘りだつた。大部分の者は此の様な荒仕事に慣れてゐない。どうぞ怪我がない様にと僕は祈つた。第一の目的は柿の木起しである。僕はこつこつと隅から掘つていつたが、早く木の所まで浅く掘り着いた者があつたので仕事が混雑した。此の時僕は、物は計畫を立て徐々にして行くことが、大切であるといふことを悟つた。大變石が多く苦しかつたが、皆よく働んだので非常に仕事が進んだ。しかし話をしたり休息の時に仕事をしたりして、力を無駄な方面に費し、休息を充分に取らなかつた事はいけないと思つた。一日中の勞働に誰も皆疲れてゐる様に感じた。

八月二十六日(第二日目)

始業前、先生の命令で僕等は一せいに道具を出した。昨日より一層健全になつたのか黒くいき／＼と健康其のものやうに見える。作業開始の用意がしてあるので、準備が早かつた。此の作業に又僕はよい體驗を得た。石が非常に多く、一つ起すにも大變な苦心を要する。しかし最後の石は大きいだけに皆興味をもつて起した。土運びの車おしこそは實に共同一致の現れだ。今日も柿の木を起せなかつたのが、不満だつた。

八月二十七日(第三日目)

想は誰も彼もそれにうなずかざるを得なかつた。一列に並ぶとつく／＼と五日間の勤務の有難さを覚える。僕等でもよくもあれだけの穴が掘れたものだ。本當に皆の眞剣な労働、共同一致の力があつてこそ、これだけの作業が出来たのだ。これからは大いに身体を強健にし此の力で一氣に二期を乗り越えさう。

防空演習

一年 久保欣三

僕が尋常六年生の時の事であつた。今夜から防空演習三日間の第一日に入るのだ。僕も大宇高番少年夜警團にまじつてゐたから、夕御飯をすまして、七時迄の集合の約束にまだ時間はあるが、字の會議所へ行つた。だん／＼暗くなつて来てやがて夕もやのこむる空に、空襲を告げるサイレンが遠く長く聞えて來た。すはこそ、とばかり僕等はすぐ二組に分れて字を二つに分け、僕等は眞直に道を上つて、家々の電燈のおほひがうまく出來てゐるか、光が戸外にもれてはゐないか、と見廻つて歩いた。「あつ、あそこの家が少しもれてゐるよ」と誰か言つたので、すぐどやどやとその家の前に行つて、「あかりがもれてゐます。あんばいなほして下さい」と大き

聲で泣く。又機嫌のよい時などは何かわけの分らない事を家の者に話す。昨日學校から歸つて來たら「ア／＼／＼」と大聲で火のつくやうに泣いて居た。僕は可哀さうになつたので靴を机の上に置くなり早速弟の枕元へ走つて行き抱き起して外に連れて出ると、弟は忘れたかのやうに泣き止んでこ／＼笑つてゐる。まつげに涙の玉が光つてゐる。土間の天井に燕が巢をかけてゐる。其の燕のさへづる聲でも晴雄ちゃんに聽いてゐるらしい。圓い目をぱつちりと見張つてゐる。僕は弟が好きで／＼たまらない。又姉妹も弟が好きらしい。此の間僕が「彦中体操」をしてゐると弟が部屋からちよ／＼と走つて來て僕の手真似・足真似等をする。僕は弟の發育の速いのをつく／＼と感心してゐる。母が毎日弟を世話せられるのを見て僕の小さい時も母からあの様に世話をした貰つたのだと思ふと今更のやうに孝行をしなければならぬと思つた。弟は今では少し物が言へる様になつた。一昨日の事である。弟が「トト……」と言つて家へ歸つて來た。僕が「取つてやらう」と網を持ち出して川へ行き「ひごひ」を挿らへてやつたら弟は嬉しさに「ひごひ」の尾びれから頭から体中をなぶつて嬉しさうに持ち上げ、家の者に自慢さうに見せながら「トト……」と言つてゐる。その有様を僕は見ながら弟の喜びを味つた。母に叱られると部屋の間へ行つて泣く真似をする。

五六

い聲でどなつてやつた。すると、中から「御苦勞様今すぐ」といふ聲が響いて來た。しばらく見てゐると、すぐ眞暗になつたので、僕等は安心して次に向つた。他には、このやうなあかりのもれた家は一軒もなかつた。一緒に行つた一人が、「なんであんなに氣がつかないのだらう。一度外へ出て、見てみりやいゝのに」と憤慨してゐた。會議所に十時頃まで居て、その間にもう一度巡つたがさつきのやうなことはなかつた。歸る時には空襲警報解除のサイレンが、靜かに鳴り響いた。光のもれた家が一軒ある爲に皆の人が一所懸命になつて光をもらさないやうに努力しても、敵の飛行機に見つけられてしまふ。本當に共同一致といふことは、多大な力があるものと、この防空演習によつてはつきりとわかつた。

僕の弟

一年 大辻幸雄

僕の家では今まで兄弟が三人あつたが三年前の昭和十二年の三月に赤ん坊が生れて四人になつた。二人まで女であつたが今度は男の子が生れて來たので、僕はうれしくて／＼たまらない。父母も大變喜んで居られる。弟の名を晴雄と言ふ。晴雄ちゃんはお乳がほしいと思ふ時などは顔を眞赤にして大

本當に幼い子供は可愛らしいものである。

五千米マラソン

一年 辻 昭三

待ちに待つた十一月十五日はやつて來た。幸に晴天だし僕は嬉しさと心配にわく／＼しながら登校した。二時間の授業を終へた後、運動場に出た。張り切つた皆の顔が多く見えた。出發の時間は近づいて來た。僕はす早く支度をしてマラソンの始まるのを今か／＼と待つて居た。先生の御注意があつて後、スタートの線に四百餘名の者が集つた。少し心配だ胸がどき／＼する。コースは、中學校より長會根の湖畔を通つて歸つて來るのである。道程は五千米だなどと思つて居る中に「ドン！」とピストルが鳴つた。さあ今だ、と思つて走り出したが皆はもうどん／＼と先を走つて居る。ひよいと振り返ると僕は後から三四番だつた。これではならぬと息を揃へて胸を張つて走つた。町角を二つ程曲つた時には、もう一人を抜いて居た。しめたと思つて大股で走り出した。其の中にだん／＼苦しくなつて來た。其時向ふに監督の先生や三四人の生徒の顔が見えた。それで元氣を盛返して、一所懸命に走つた。長會根湖畔だ。其頃大分歩き出した者が居た。僕は

五七

こゝだと思つてどん／＼抜いた。其處で上級生に赤色の輪を貰つた。其れを肩に引掛けて走つて居る中に歩く者が益々多くなつて来た。僕は未だ一度も休まずに走り續けて居たので愈々足の疲を感じて来た。だが其れもしまひには分らなくなつて、足は只前へ前へと出て居るだけだつた。其時やつと第三の關所についた。其處で又色の輪を貰つた。次に女學校前を通つた。「あゝもうすぐだ」と思ひ直して勢よく走つた。其邊で又五六人を抜いた。やがて學校に刻々近づいて行く。向ふにお濠の石橋が見え出した。疲れた體を耐へて元氣を出して走つた。呼吸はもう揃はなかつた。此の時二年生の人達が凄い勢で見る間に僕を抜いて行つてしまふ。残念だが仕方が無い。さうしたまゝでとうとう門の手前百米程の所へ来た。僕はもう夢中で走つた。さつと門を越すと係の先生に名札を渡した。やれやれと思つて運動場を見渡すと、友達が澤山居た。後でもつと早く走ればよかつたのと思つた。第一の失敗はスタートがいけなかつたのだ。來年はもつと頑張らうと思つた。

五千米マラソン

一年 林 昭

ける。橋を渡り石垣の間を通り、決勝點へ着く。繩張内へ入つて、「やれやれ」と思ふとどつと疲れが出る。エフ・テープ等を渡すと、やつと解放された氣になつて、木の根方に腰を下す。

さて、考へて見るに此のマラソンは、成績が非常に悪かつた。僕の前にはもう澤山の者が着いて居た。だから三百番以下であつたらうか。まだ殿りにならなかつただけが良かったのだ。あゝ——何故僕の身体は此の様に、弱いのだらうか。情無くならない。もつと強健な身体を作り、二年の時にはきつと入選しなければならぬ。

五八

十一月十五日、空は晴れて絶好のマラソン日和、短縮二時間授業後軽い服装をして、校庭へ出た。皆張切つた顔で体操後、ずらりと出發點へ並んだ。白線の太く引かれた上に立つた。胸がどき／＼する。「若し殿りになつたら」と思ふと心配だ。もう一度服装を整へる。その中に先生が出て來られる。「ビリ／＼」「用意」「バーン」馳け出した。「一二、一二」ゆつくりと足を運びながら……。

初めは元氣にまかせて、勢よく走つたが、お濠の周りを馳け終つた頃には少し疲れて來た。「まだ／＼」と心に勵ましながら馳る。道を曲る頃には、大分疲れて來た。歩いて見たくなるが、どん／＼抜かれると、「負けては」と思つて又速く馳ける。汗が流れる。息ははづむ。横腹が痛くなる。「少し歩かうかな」と思つたが、誰も歩いて居ないから恥しい。少し弛めに馳ける。細道を過ぎ、石のごろ／＼ころがつた道に出る。愈々疲れる。もう抜かれても抜き返す元氣が無くなる。土手へ上ると、たまらなくなつて歩く。「ハアハア」大きく息がはづむ。しばらく歩いて居たが、後の方を見ると餘り人が居ないので、又走り出す。しかし前の方にも歩いて行く者、後の方にも歩く者があると、又歩きたくなる。「こんな意氣地の無い事ではならぬ」と心を吐りながら走る。土手を下る。急に元氣が出たやうな氣がして勢よく馳ける。前の疲れた者や歩いて居る者を追ひ越して、足どりに軽く馳

詩

防空演習の夜

一年 北村 好夫

「電氣を外へ洩らさないやうに」と
眞暗な中で聲がする

忽ち

「敵機襲來」

「焼夷彈が四ツ角に落ちました」

又聲がかかる

皆バケツを持つて外へ出る

青白い光がばつと目に映る

それ水だ！ 砂だ！ 席だ！

威勢よく

ポンプが来る

水がかゝる

「もう消えました」と



防護園の人がふれ廻つてゐる

夏 山

三年 西村 義 廣

あゝ夏は今盛りなり
雲の峯ゆく爆音高き戦闘機
太陽の灼熱、きらめく光
我は今山頂にあり
四周たゞ潑刺たる生氣
樹々は輝き 谷々は歌ふ
蟬の風 木の香 草の香
あゝ夏は今盛りなり

建築場にて

三年 吉田 久太夫

のみの音、鋸の緩やかな響
バット飛び散る木片
組合はされてさつと空に躍る木材

おが屑の香
鉋屑の舞踊

道具をとり散らかした大工の逞しい胸
煙草入や 土瓶や茶碗の散亂
日の長い 夏の午下り
建築場ののみの音
鋸の響
どこかに風がある

別 離

四年 染川 人 仁

秋風に一年の挽歌をさく
小鳥なく悲しき夕なり
陸士へ海兵へと別れゆく友幾人
校庭の銀杏の下に
嬉々として遊びし友は
はらはらと落つる木の葉よ
城山に流るゝ鐘よ、鐘の音と共に
美はしき學園を去りゆくよ
さらば さらばと

高く飛びて輪を舞ふ
城廓の上を去らずして

聖 戦

四年 山 根 悟

將士は行く 征馬は勇む
日の丸の旗 打ふりながら
勇ましく 猛きますらを
皆第一線へ 戦線へいそぐのだ
硝煙の渦巻く中へ

曠野の中 頑敵は動かす
撃ち向ふ小砲大砲
勇ましく 猛きますらを
悪戦苦闘の末に 萬歳々々と叫ぶ
連戦連勝の喜び

飛行機は飛ぶ 陸に海に
偵察に 爆撃に 追撃に
勇ましく 猛き丈夫

彦 根 城

四年 小山 十三男

城山に登りて見れば 思ひは蘇る三百年の昔
彦根武士 尙武のいでたち
老武者 若武者 打集ひ 在り通ひ
天守閣の下に 大手搦手の橋の袂に
光あり 勢あり 如何ばかり明るき陽の下に
ありけらし 花橘の井伊の居城

今は昔の青葉若葉
炎熱の夏の日に照れど
このかみの若木古木の勢よく
天にぞ擲がれど
名城今は苦むして
城壁の名残をとゞむ語り草

空軍の亂れなき一隊
一命は捧げたり 陛下のこの機體に

日本

四年 片岡友次

日本
祖國日本
血族日本

愛國の情熱は團結の火塊と燃ゆる

東西文化の華咲き匂ふところ

天壤無窮の君在す皇國

朝日はじめに照らす國

おゝ日本わらが祖國

星

五年 寺本正

凍て切つた

海は笑つてゐる 微笑んでゐる

秋は夕暮 田舎路ゆけば

こぼろぎほろく 茜の入り

もろこしの葉 ゆれ立ちて秋をさゝやく

ひいやり 水のごと頬を

撫でゆく朝の風 清い風

葉末にむすぶ 露の量は増して

素足に玉ちる 清し冷たし、朝戸出の勇み

出船

五年 寺村道夫

純白の帆は風に膨らんで

仄かな現實の潮の香に興奮してゐる。

爪立ちして海の子は聲々に叫ぶ

吹けよ 東風 吹けよ東風

新生の夏の息吹の

さやかに吹けよ 浪もちて來と

かくて、怒濤と暴風雨と——必然の十字架を

屋根の上に
妖しくも瞬く氷の様な星一つ

x x

太古の大自然を思はせるやうな
夜の不氣味な沈黙

その鋭き星の光は、色は

愁然として私語く

眠りに耽ける人間よ

來るべき大きな出來事を知れるかと

暗示するが如く

夏から秋へ

五年 吉田謙一

緑なす山脈、さざりにかすみ

しばなく小鳥と谷のせゝらぎと

チントに細く煙立つ朝明け

波の光、赫い太陽

光れる真帆に青い空

逞しく背負ひて生を貫きとぼさんとするのが
船のエスブリだ

霧の湖

五年 寺村道夫

霧深く小暗き森のうき島の

湖は静かに…… 鈍色の

夢と黄昏る

ほそやけき月影は消えて

靄立つや水の闇のひたひたと音のみにして

湖の彼岸の灯ぞ見ゆる

峯に立てば遠山にうす明りして

月出でそめぬ

湖上をゆるがして鐘の音は消ゆ

さゝら波湧き出でてくるごと

月淡く峰めぐりそめぬ

短歌

五年 松田 又一

氣持よく奉仕の蹠の動く見ゆ近江の宮の青年學徒

炎天の熱き土砂運び来てこゝに固めつ近江神宮

夕されは汐満ち來り子供らの砂遊び場の足跡なくなりつ

五年 宮 戸 弘

夏課題まだ終らぬを梢々につくつくぼうし秋らしくなく

電燈を消したる後の部屋ぬちにいね待ちの月射しこみ入るも

五年 乾 勝 造

名残なく空は暗れたりすばしく往きかふ燕の數かぞへつゝ

ともすれば物思ひして學びだに忘れかちなる夜の吾を叱る

星一つまたゝき止みて落ちにけり青蘆そよぐ河邊の間に

四年 北村 一二

停電のしじまを點するうそくの淡き光は机をてらす

秋更けて鳴くこぼろぎの唯悲し暗き夜空の星の數々

四年 伊藤 彌 平

涼風に室に入りたる大蜻蛉物に當りて狂ふ夕ぐれ

闇空に星の流るゝ風呂かへり肌にすがしく袖の香匂ふ

山へ登る明日をうれしび枕邊の時計の音のしるけく刻むも

山に登り汗しぼりつゝ見下せばはるかの下に家一つ見ゆ

川のへの小舟の中に遊ぶ子の脚くるゝと夏さりにけり

三年 山本 善 介

日沈みて涼しき風の流れ入る家の中より満月を賞す

三年 押 尾 清

和英辭書兄の手垢のそのまゝにゆづられぬ試験合格の夜

三年 平尾 平 五郎

汽車の窓琵琶の湖しらゝと光りて見ゆる月夜なりけり

ぬり立てのポストの前に子等二人注意書を聲立て讀み居り

三年 久 木 幸 男

征く兵の武運長久をこの旗にこめてそ打振る見送る吾は

さまゝの人の思ひを夜の汽車冷たきレールに乗せて馳せゆ

くか

三年 國友 武 夫

水の面に夕燒雲のあかあかと映れるまゝにくるゝ夏の日

美しき蝶とり逃がし思はずも残念と叫ぶ昆虫採集

北支よりかへりましつる父上を出迎へてまづ黒き顔みる

三年 清水 眞 人

炎天に蹴ふり上げてふり下しこつこつ穴を掘りゆく作業

三年 中川 恒 夫

月の影さやかにうつり水面に遊ぶ蛙の二つ三つ見ゆ

四年 三 木 幸 夫

戦線の將士偲びて炎天に力の限り砂利車牽く

劍太刀ぬきて打揮る思ひかなふり上ぐる蹠に夏の陽の照る

四年 菅 原 道 武

戦線のおかつはもの苦しみを知れと流るゝ奉仕のこの汗

大空のあらはに見ゆる裸木にたまたまにしらぬ鳥の來てなく

四年 久 保 澄 海

燈火管制解除のサイレン止みてしばし外の面の間に轟聲する

物干の竹に南瓜の蔓のびて黄色き花のゆるる朝風

三年 横 野 信 隆

隣方の雄姿を競ふ山見つゝ晝餉とりけり伊吹の頂上

大阪のお城に立つて見下せば時局下なるかトラツクの数

三年 杉 原 丈 夫

人の顔我をあざける如見ゆる試験の結果わるきその日よ

三年 北川 和 幸

波を追ひ波に追はれて子供らは湖邊の夏をひねもす遊ぶ

三年 藤 野 正 夫

水揚げの音もあはれに發動機、つゞく早に稲田も喘ぐ

二年 北川 文 男

蟲の聲何處にやあふむ唯一人留守居の家にいでゝ來鳴ける

長き夏の休みも過ぎぬ明日よりは愈ゝおのれが業にはげまん

二年 中村 忠 太郎

美しく植ゑ渡したる早苗田に伊吹の嶺の映りて光る

二年 林 常 雄

かゝやける眞夏のはまを子供等はしぶきを上げて湖へ馳せゆ

くよ

二年 北 村 隆

夕ぐれの琵琶の湖の面に薄煙のこしつゝゆく川蒸氣船

二年 堤 喜 三

指折りて頭かたむけ筆とりてけして又かき歌をつくるも

弟の病むさま見守り胸せまり手さしのべつせむすべしらす

妹を去年失ひて今年またいとし弟に先き立たれたる

二年 西 堀 壽 雄

クラゲ一つ見つけてはしやぐ海の子の足に戯るゝ波頭なり

潮風に吹かれつゝやる轉回に見入りてありぬ濱の人々

二年 重 森 守

スケッチ帖伊吹を望み畫筆とれば魚とる子等の覗きに来れり

二年 日向 成夫

秋の畠棚より垂る絲瓜の實ふらふら揺れぬ朝風にゆれぬ

二年 田中 貞三

電車をば追ひ越して踏む自轉車のペダルも輕き夏の朝かなくていねいに店員が雜誌揃へてゐる朝の本屋へつとはいりゆく

二年 廣田 一彦

作業あとの木蔭なる砂山に大文字になりて疲れを憩ふ

二年 大橋 淑男

高野山ケーブルカーで上りつゝはるかに望む紀伊の山々

二年 原田 勝

波ひとく黒雲出でぬ弟と蛭拾ひの手をやめにける

二年 樋口 滋

わが家の實はこれと笑ひつゝ母はうごかすミシンなるかな
輪がかりてひとり夜空に澄める月冬近き夜の寒さ身に沁む

二年 若林 邦雄

庭隅に咲きおくれたるホウセンカ弱々しくも月の照りをり

二年 福坂 榮一

青々と植ゑつけられしこの夏田早も稔りて兵糧となれよ

いつ見ても日本の地圖は小さかり今や大きくなる日來れり

二年 岩崎 義彦

朝毎のラヂオ体操のうれしさよ思ふぞんぶん大氣を吸ひて

一二とラヂオに合せて手を振れば朝日昇りて光まばゆし

二年 榎 喜三

むらがりて光るとんぼの走り行く夕日の小山のしばし明るき

二年 茨木 英一

朝顔の花の赤白をよそよと動ける朝の風の涼しさ

二年 渡邊 宇一郎

友達と炎天の下の土運び赤銅のはだとなりゆくうれしさ

二年 谷澤 博二

母上はお茶を進めて旅僧に佛の御話懇にきく

二年 御池 尙男

暖き午後の日射しに縁に出でて犬とたはむる老いたる父上

二年 富田 晃勝

我等皆大きくなりぬ次々に母の背丈を越してゆきけり
こんこんと湧き出る水の冷たさよ今日の土産と水筒に汲む
蚊帳の中蚊は人間を食はんとて蚊帳のぐるりを廻る夜の闇

二年 西村 才四郎

はらはらと落つる木の間の朝露も亡き母したひ落つる涙か

二年 西村 才四郎

昨日見し母の笑顔も今日はなし母は花さく御佛の國に

二年 西村 才四郎

飛びうつる小枝のゆらぎ子雀は羽をひろげてふみとまりけり

今日もまた水の話に明け暮れぬ雨の降らざる二月餘り

俳句

夕立や氷の旗のぬれにける

五年 宮戸 弘

菊鉢に杖長々と支へけり

行燈に日の丸赤き地藏盆

火の魂の話になりぬ涼み臺

夕顔の今開くべし軒の風

畑のもの皆躍るなり喜雨の中

月光を浴びつゝさぐる虫の聲

窓越しに見る樹へ蟬の止りけり

朝顔の花とりゝや夏の朝

馬洗ふ小川せばめて青すゝき

夏の朝濱朝顔の露ながら

籠の子にすゝき持たせし田草とり

凱旋の英靈迎ふ秋の雨

遺骨つく米原驛や蟬の聲

秋雨にぬるゝがまゝの案山子かな

四年 西村 芳之

四年 西村 芳之

村田 大三

労働奉仕腕で汗をふきにけり

四年 古川 英一

砂運び夏の河原の幾かへり

緑蔭や石組みて炊くハンゴ飯

炎天やハンドル握る脂の手

海の青の目に沁むばかり砂日傘

橋ぐるる舟の高荷や夏の空

夕秋や湖ひろく窓に澄む

口々に星の名語るや夕涼み

夏山やぼろ靴に雲をふまへて立つ

勤勞のかへり掌のまめを敷へつゝ

籠を抜けし螢を拾ふ疊かな

線路二本に砂さびつげり夏の草

蟬鳴いて松一本や忠魂碑

七夕の色紙買つて歸へる子等

水車止りて久しきひでりかな

三年 可須水 義俊

三年 可須水 義俊

野村 源藏

小村 八郎

瓜抱いて子の眠りをる乳母車
蝶よ待て我靴の紐をむすぶまで
白蓮を山影の池にながめけり
夏の朝往來にきく下駄の音
井戸端のつるべに青き蛙かな
いちじくに木がくれて柿二つ三つ
蟬の聲の聞ゆる林通りゆく
月清しひろく續くすゝき原
カス／＼と水あげかねしポンプかな
大空も海も澄みたり泳ぎかな
川風や白衣勇士の鮎を釣る
大早天琵琶の水もやつれけり
舟蟲や窓に來てゐる南風
信號兵を真似る子供や春の山
夕立にしばし木の葉のおどりけり
かなかなと日ぐらしと僕と暮るゝ日と
斷崖の岩もる水や百合の花
夏の夜を人にもまれぬ二七市
白服に夜風涼しく戻りけり
もらひかへるコツプの中の金魚かな
庭石の影よりなきぬ虫の聲
窓により一人眺む北極星

三年

馬場正敏
森順治
萩野義治
樋口幹
八木義男
久保田利一
新木蕃
北川和幸
西川庄三
北川善九郎
泉濯纓
田中豊
岡崎陽一
白居正一
馬場健三

ちりほこり汗ものかはと奉仕かな
夏瘠せの目の棲さよ怒りける
水泳前うなづき聽ける注意かな
目に映えて一入赤きトマトかな
きりぎりす岐阜提灯の上に鳴く
かくれんぼ蚊にさゝれつゝこまりけり
庭の隅日車草の高々と
日傘さして背の子の顔桃色に
夕ぐれやほのかに浮ぶ伊吹山
山ゆりや頭をたれてにらめつこ
丹精のわが朝顔の今朝もさく
秋日に松葉は光る金の色に
大陸に櫻花咲きけり移民村
夏の夜の停電や風の氣味悪く
むしが鳴く野道で友と別れけり
闇にきこゆる蛙の聲ガアガアと
涼しさや日の落ちかゝる湖の上
靴脱いで足を冷しつゝ一休み
夏の風我等のシャツをふくらます
店先にならべ出された西瓜かな
蛭取り取りたる後の濁りかな

六八

二年

來本義次
石原龍英
草野山朗
立岩一夫
西村元佑
山本茂夫
大橋淑男
古川清造
田中貞三
窪田耕治
林常雄
清水外志男
日向成夫

靴脱ぎに横はりゐたり蛇の皮
野を行けば足近くバツタ飛び
夕月や電柱の影長々と
靜かなる水のながれや夏の月
木の葉たれ川水もなき日照かな
朝つゆやすそはし折つて馬草かる
池すみて石ににげ散る魚の群
日本の始りし日よ梅の花
打水に逃げまどひたる蜻蛉かな
赤白く火星かゞやく早かな
涼風やきりぎりすの籠揺れてゐる
夕やみに白のダリヤのぼつかりと
水涸れて井戸の中なる虫の聲
柿の實の九月の色になりにけり
晴、晴とラデオは叫ぶ大早
たそがれて河原の土手の浴衣かな
客來る盆の上なる麥酒かな
道をゆく色とり／＼の日傘かな
汽車走る瀬田や眞下に蜆舟
雲海に氣は晴れ渡る伊吹山
馬草かりいくさしのびて勵みけり
蟬とりの子らかけまはる午睡どき

二年

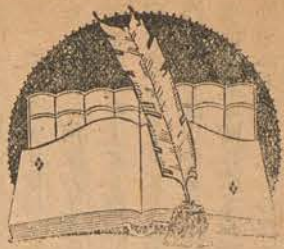
日向成夫
富田晃勝
前川和夫
廣瀬義雄
西村昇
西澤清
中村八壽一
藤川清
北村隆
杉立隆
武井正三
安達龍二
富田晃勝
那須行信
小谷久造
渡邊宇一郎

朝まうで多賀の社の蟬のこゑ
奉仕隊汗をふきふき土運ぶ
新學期櫻の花の咲きにけり
夕立の過ぎて目にしむ青葉かな
見わたせば何處まで續く誘蛾燈
夜の風に柿落つるかと思ひけり
柿の木に上りて食べらうまさかな
撒水のかわくかわくのひでりかな
鳴く虫の音も細々や秋ひでり
炎熱應召のはたひるがへる
應召の朝晴れにけり鳴く雲雀
湖の水涸れにけり雲もなし
はや秋か日暮れてきく虫の聲
絶壁の巖を流れおつる清水かな
秋空やとんび大きく廻りけり
夏の月銀波の躍る湖上かな

二年

茨木英一
岩崎義彦
中澤晴
佐野孟俊
中村忠太郎
北川文男
西村才四郎
谷澤博二
梁瀬貞樹
谷恰道

六九



雜錄

校友會各部役員

昭和十四年度

會長 足立校長先生

副會長 堤先生

學藝部

部長 寺本先生

理事 居井先生、志俣先生

委員 五年 林榮一、島津清

四年 柴田正男、小川誠一

三年 岡崎陽一、新木蒼

雜誌部

部長 尾田先生

理事 居井先生、井上先生、大崎先生、小泉先生

委員 五年 宮下勉、小西繁次、三坊東三、青山一男

四年 西村芳之、向坂正勝、澤田久雄、木下長治

三年 野村源三、村岸繁夫、久木幸男、樋口幹

圖書部

部長 高塚先生

理事 五味先生、尾本先生、藤澤先生、小島先生

委員 五年 橫田彰、樋口清、金子治彦、小堀滋彦、坂田保、中

四年 川恭二郎、

相場慶次、中川三郎、小林滿男、濱中光覺、染川人

仁、泉巖

三年 田中滋治、大谷潔、保知誠二、細井俊司、堀惣英、

塚本義一

劍道部

部長 田中先生

理事 大崎先生

委員 五年 中津孚、松田又一

四年 北村喜八、松田又次郎

三年 增谷外世嗣

柔道部

部長 村山先生

理事 山縣先生

委員 五年 橋村節治、大師慶造

四年 磯谷勇、澤居武雄

三年 村瀬總一郎

端艇部

部長 金盛先生

理事 井上先生、森田先生

委員 五年 松井榮助、藤居正太郎、中村滋、

四年 上田恒男、久保田久彌、矢守俊之

三年 八木義男、大西二良、細居善一

野球部

部長 猿山先生

理事 柏嶋先生、志俣先生

委員 五年 菅井喜造、草野文平、川村博通

四年 山中利一郎、宮川正夫、近藤次三郎

三年 藤田逸人、岡田國利、上杉禮

庭球部

部長 平井先生

理事 水本先生

委員 五年 坂邦男、北川鐵男

四年 吉田一男、奥田元重

三年 野路井一、國友武夫

競技部

部長 丸茂先生

理事 田村先生、茂木先生

委員 五年 葛滋郎、村岸眞、清水正男、山田文夫

四年 木下勉三、塚本一雄

三年 馬場正敏、寺村孝一、辻數雄

水泳部

部長 白井先生

理事 後藤先生、田村先生、杉原先生、筒井先生

委員 五年 中村光信、江龍貞藏

四年 戶所治雄、佐野國雄

三年 水谷彌一郎、堀部治



校友會會計

— 昭和十四年度 —

前年度繰越	金額	五〇〇・六
職員會費	金額	一六五・〇〇
生徒會費	金額	五、五四四・〇〇
利生會費	金額	四一〇・〇〇
合計	金額	六、一七五・〇六
支田ノ部	金額	一二〇〇・〇〇
圖書部	金額	三〇〇・〇〇
藝部	金額	五五〇・〇〇
道部	金額	劍二一〇・〇〇
艇部	金額	柔二一〇・〇〇
球部	金額	六〇〇・〇〇
球部	金額	八七〇・〇〇
球部	金額	三〇〇・〇〇
技部	金額	二五〇・〇〇
水部	金額	二五〇・〇〇

衛生費	八〇・〇〇
圖書費	一五〇・〇〇
賞品費	一〇〇・〇〇
紀元二千六百年記念式費	二〇〇・〇〇
卒業式並豫餞會費	二〇〇・〇〇
陸軍大會費	二〇〇・〇〇
行軍費	一〇〇・〇〇
陸軍大會費	一〇〇・〇〇
道場修理費	二五〇・〇〇
運動會費	二〇〇・〇〇
一般運動會費	七二〇・〇〇
縣體育協會費	五一〇・〇六
端艇新造費	三五〇・〇〇
雜備費	四六二・〇〇
豫備費	六、一七五・〇六
合計	本年(繰越)
特別會計ノ部	一〇〇・〇〇
紀元二千六百年記念式費	六三九・九四
端艇新造費	七三九・九四

編輯後記

○こゝに校友會誌第四十九號を發行する。時はこれ紀元二千六百年を迎へての榮ある紀元節である。實祚の無窮と、大日本帝國の萬歳とを心より叫ぶ。

○支那事變第四年の春である。事變處理、新東亞建設への邁進と之が完遂を祈るや切なるものがある。

○本誌は前號と同じく、否、前號にも増して至つて貧弱である勿論例月「彦中」が刊行され、従つて豫算の大部を「彦中」に割愛して、從來の論説、作文、部報、校曆等も「彦中」に譲り、本誌に於てはこれが掲載豫定の洩れを拾ふ程度にしたためである。事變下の緊縮と時局とを容れて思ひきつて減頁した意味もある。偏に諒とせられんことを願ふ。

○時下嚴冬、卒業修業期を前にし、非常時局下の學徒として一段の奮闘を希うて止まない。(一月十日)

明治廿七年五月三十日内務省認可
昭和十五年二月廿五日發行 (非賣品)
滋賀縣立彦根中學校内

編輯者 尾田 鶴治 郎
發行所 彦根市五番町六二ノ一

印刷者 村下 斯 朗
印刷所 彦根市五番町六二ノ一

發行所 滋賀縣立 校友會
印刷所 彦根中學校

